

廊下を通して二面が庭に向かって開いていて、見事に自然と融け合った豊中市岡町の奥野家「桜の庄兵衛ギャラリー」での演奏会、古く、固くなった柱・梁などの木組みを伝わって木野のヴァイオリンが家全体に広がる、家が鳴っている。そして、庭からの優しい光の中で木野と伴奏の藤本によって作り出される音楽を家全体が支え、その様子を白い子壁がじっと見つめている、演奏者と聴衆がそしてまたヴァイオリンとピアノが混然一体となって、音楽を作り出している。美しいメロディーだけでなく、演奏者の細やかな表情の変化や息づかいまでもが汲み取れるアットホームで温かい空間、まさに世界で一つの素晴らしく楽しい音楽の集いであった。

木野雅之は日本フィルハーモニーのソロコンサートマスター、使っているヴァイオリンは 1776 年製のロレンツォ・ストリオーニで、師匠のルレッジーロ・リッチから譲りうけたもの、ロンドンにも住まいを持ち、精力的に世界を駆け巡るヴァイオリニストである。年間の演奏会は 150 回を超えるという。それでいて、頼まれれば小さくても特徴のある音楽会には気さくに応じる、温かく人なつこい性格の持ち主、豊岡市ハチゴロウ戸島湿地とコウノトリの郷公園で、人、コウノトリをはじめ湿地の小



動物・植物たち自然を聴衆とする音楽会を開いたこともある。エネルギー溢れる体から繰り出される強く、美しく、そして繊細なヴァイオリンの素晴らしい音色と高度なテクニックは聴衆を魅了せずにはおかない。伴奏の藤本史子は木野と同郷の熊本出身、びたりと息の合ったピアノ演奏で木野のヴァイオリンを弥が上にも盛り上げる。

コンサートはバッハのアリオージョで静かに重々しく始まった。続くブラームスヴァイオリンソナタ 3 番は、生涯独身を通したブラームスが死を予感しはじめたころの作品で、人生の喜怒哀楽がちりばめられているとは木野の弁、優しさ、憂い、喜び、怒りの感情に静と動の心が交錯しつつ、人生のまとめをするがごとく力強く終わる。プログラムの前半はショーソンの詩曲をもとにして書かれたというイザイのエクスタシーで聴衆に静かな恍惚感と満足感を与えて締めくくられた。後半は、映画「戦場のピアニスト」で一層人気の上昇したショパンノクターン遺作の甘くもの悲しいメロディーで始まり、一転してクライスラーウィーン風小行進曲で聴衆をうきうきさせる。続くマスネのタイス瞑想曲で過去への美しい回想にうっとりさせたと、ロンドンの暗く長い冬から生まれたというエルガーのためいきが演奏される。メランコリックで物憂い美しさの中に「よしやるぞ」というような気持も伺える曲である。そして最後をビゼーのオペラカルメンの中のアリアをつないでつくられた情熱的で奔放なサラサーテカルメン幻想曲で締めくくるといふ心難い構成であった。聴衆の感動に応えたアンコールではエルガー愛の挨拶とラフマニノフハンガリー舞曲が演奏された。

音楽会の会場の奥野家は、国の登録文化財で築後 200 年を超え、木野のヴァイオリンとほぼ同年代である。当主は阿部領桜塚村の庄屋で、村年寄りを勤め、代々「庄兵衛」を襲名した。主屋は入母屋造の大型農家建築で、大きくて太い柱、梁や鴨居などで作られた木組みが美しい。木は伐採されてから 100~200 年は歳を経るごとに水分が減って固く強くなるという。化学的に言えば、木材の構成分子であるセルロース同士の相互作用が強くなって音を吸収し難くなる。高い天井、固い木組み、視覚的にも美しい空間が豊かな音と共鳴

する。音楽会の聴衆だけでなく、つしに住むヤモリ、庭のみみずや蟻たちも今日の音楽を十分に楽しんだことであろう。

文化財の保存はその国の発展と世界の平和にとって必要欠くべからざる要件の一つである。その活用は国民の文化財保存の重要性への認識を深め、意識を高めて、保存活動の基盤作りに役立つ。今日の様な有形文化財と無形文化財の融合による文化活動が人々の文化を大切にする心を養い育てて、文化の深化と世界の平和に貢献することは間違いない。奥野家の文化活動は奥野夫妻のご努力とお二人の小学校以来の同級生を中心とする地域の人たちの力添えによってしっかりと支えられている。行事の企画、実行、写真・録音などの記録から庭の掃除にいたるまで、すべてこれらの人たちの手造りである。これからも桜の庄兵衛に多くの人々が集い、その人達によってこの奥野家が美しく生かされ、新しい文化が発信されていくことを期待し、このような素晴らしい集いに参加させていただいた喜びをかみしめつつ筆を置く。

本稿は、桜の庄兵衛 *information vol.59 2011,1* 掲載の文章を、許可を得て一部変更のうえ、転載するものである。